

白川町若手教員指導力向上プロジェクト

町内の小中学校の教職員ネットワークを構築し、自ら学び続ける教職員集団を育成する

白川町教育委員会

1. はじめに

第3次岐阜県教育ビジョンにおいて、目標の一つとして優れた教職員の確保と資質・能力の向上が掲げられ、教員育成指標に基づき、教職員が自主的・自律的に自らのキャリアステージに応じて求められる資質・能力を高めていけるような研修体系の構築が示されている。また、若手教職員に対し、自己課題に応じた選択型研修の実施や研究活動の支援を行うなどの、研修の充実が図られている。こうした動向の背景にあるのが、教員の経験年数の均衡の崩壊である。近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように、先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要であるとされている。

こうした状況は、山間部にある小さな町である白川町においてより顕著な課題となっている。図1は、令和4年度の白川町立小中学校（4小2中）年齢別本務教員数（管理職を含む）をグラフ化したものである。30代・40代の本務教員数が、圧倒的に少ないといえる。教を請うべき経験の浅い教員よりも、彼らを指導し得るミドルリーダーとしての経験を有する教員が少ないため、知識・技能の伝承だけでなく、円滑な学校運営が困難となる可能性が高いといえる。また、特定の教員が複数の校務分掌を担うことになり、バーンアウトを起こしえない。更に、学校運営に携わるリーダー的役割を担う存在が不足することにより、新しい時代に対応すべき知識・技能をもった若手教員を十分に生かすことができないという可能性もある。

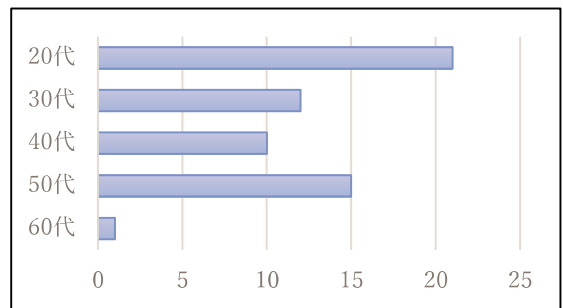


図1 白川町小中学校年齢別本務教員数

このように、教員の経験年数の不均衡は危機的状況にあると言えるが、見方を変えれば、新たな学びやチーム学校の理念を推し進め浸透させることにより、次代を担う子どもたちへの教育の質を今以上に向上させる機会であるとも捉えることができる。これまでの知識や技能を一方向的に若手教員に押し付けるのではなく、ベテラン教員が育ってきた環境とは違う環境で育った若手教員がアウフヘーベンすることにより、新しい考え方が生まれるのではないかと。ベテラン教員はこれまでの自己の指導を省察するとともに、新たな領域に挑戦する学びを得ることができる。若手教員はベテラン教員から伝承された知識、技能を有効に活用し、時代のニーズに対応したものに变化させていく学びを得ることができる。こうした学びを担保する柔軟な研修の場を拡充していくことが必要であると考えた。

2. 「白川町若手教員指導力向上プロジェクト (Shirakawa Young Teachers)」の立ち上げ

若手教員指導力向上プロジェクトとは、白川町に赴任してきた若手職員（自称）が集い、お互いに抱える悩みを共有しながら、協働によりその悩みを解決することを通して、教師としての種々の指導力を向上させることを目的としたプロジェクトである。白川町は、どの学校も小規模であり、職員の数も少ないため同世代職員の間関係の構築が困難である。また、土地の特性上、学校間が離れており、職員同士の交流も困難である。さらに、放課後いつまでも学校に残って仕事をするといったこともできなくなっている。こうした課題に対し、若手職員が勤務時間外に気軽に集い、ともに教育について語り合うことができる場を提供することが、その解決の一助になるのではないかと考えた。

そこで、町教育委員会の学校教育係がファシリテーターとなり、校長会を通じて参加を募ることとした。



図2 プロジェクト参加募集チラシ

3. 活動内容・計画

自主的に参加を希望してきた教員を中心に、日ごろの悩みや課題と感じていること、現在力を入れて取り組んでいることなどを交流し、その中から共通の話題や課題を取り出し、年間の活動計画を立案する。

第1回の会において、集まったメンバーによる話し合いの結果、令和4年度の活動計画は以下の通りとなった。

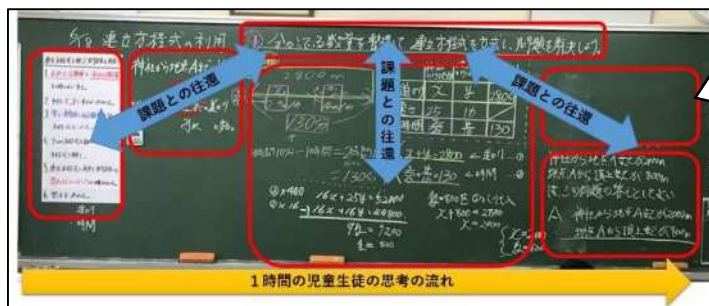
	主となる活動内容	備考
第1回	日ごろの実践を交流、共通課題を抽出	
第2回	構造的な板書実践交流会	手ごたえのあった板書の写真をもちよる
第3回	学級・学年経営実践交流会	町内のミドルリーダー的教員に講師を依頼
第4回	白川町内施設巡り	町の初任者研修を兼ねる
第5回	校内研究・指導案検討会	町内の研究会に参加 指導案の検討
第6回	ICT 機器の効果的な活用の仕方について	ICT 機器の活用実践の交流

※ 第6回以降については、随時課題を持ち寄ることで計画を立てていく。

4. 具体的実践より

〈第2回 構造的な板書実践交流会〉 令和4年6月24日 18:00～ 場所：白川町町民会館

第1回（5月20日）の会に集まったメンバーの中に、「計画を立てて授業に臨むものの、生徒の意見を集約したり、書きたいことがうまく整理できなかつたりするため、授業が終わると非常に見にくい黒板になってしまう」という悩みを抱えている教員がいた。板書の在り方については、他の教員にとっても共通の課題であったため、第2回の会を「構造的な板書実践交流会」とし、次回の会までに、手ごたえのあった実践をもちより、なぜ手ごたえを感じたのか、その要因を探ることにした。交流する中で、以下のことを今後の実践に取り入れていくこととなった。



- ・ 1時間の思考の流れがわかるようにする
- ・ 課題と思考が往還できるようにする
- ・ 毎時間、同様の構成とする
- ・ ユニバーサルデザインの視点から、使う色を限定する

図3 実践交流会のまとめ

〈第4回 白川町内施設巡り研修〉 令和4年8月17日 9:00～ 場所：町内各施設

若手教員の中から、「日々の業務に追われており、学校と家を往復するだけとなりがちで、町内にどんな施設があるか知らない。」という声があがった。そのため、子供たちを学習のために町内の施設に連れて行こうにも、適した場所が分からないという課題に直面することになる。ふるさと白川を愛する児童生徒を育成する教員が、町内のことを知らないという状況を鑑み、町の初任者研修を兼ね、「白川町内施設巡り研修」を実施した。

白川町の伝統文化である地歌舞伎の東座や、町の自慢であるパイプオルガンの制作工房、最先端ドローン技術を活用した事業など、様々なジャンルの施設を訪問し、説明を受けたり、実際に体験したりすることができた。今回、町内各施設を巡り、そこでの出会いを通して、単に白川町について深く知るだけにとどまらず、その魅力を肌で感じ、白川町を愛する気持ちを高めることができた。



図4 パイプオルガン見学

5. 今後に向けて

若手教員だけでなく、町内のミドルリーダー的な教員を会の講師として招くなどのネットワークの広がりや、オンライン会議を活用し、勤務校にいても気軽に相談したり、ともに教材研究したりできる関係の構築について考えていく。